

残留日本女性ドラマ好調

【瀋陽＝大木聖馬】第2

次大戦後に中国に残留した日本人女性の半生を描いた連続テレビドラマ「小姨多鶴」(多鶴おばさん)が、中国国内で人気を呼んでいる。日本人は、侵略者として扱われることが多い中、戦争被害者として描かれた異色の作品で、ドラマを通じて対日観を変える視聴者も多い。

ドラマは、19歳の多鶴が終戦直後、黒竜江省の開拓団から日本に引き揚げる途

中で家族とばぐれ、中国人の老夫婦に命を救われるところから始まる。

多鶴は、老夫婦に請われ、日本兵に追われてがけから転落して子どもを産めなくなった老夫婦の次男の嫁に代わり、3人を出産。子どもたちは、「おばさん」として接する。日本人であることを隠すため口がきけないふりをし、日中は採石場で働き、仕事の合間には授乳で自宅に戻るといった苦勞の日々を送る――とい

う筋書きだ。日本人開拓団が自決に追い込まれたり、引き揚げ途中で中国人に襲われたりする場面も盛り込まれ、老夫婦の夫が「日本人もひどい目に遭っていたのか」とつぶやくなど、日本人に同情的な場面が多い。

原作は、米国在住の人気女性作家、嚴歌苓さん(52)の同名の小説。日本での取材を元に2008年に出版され、中国小説学会の最優秀作品にも選ばれた。

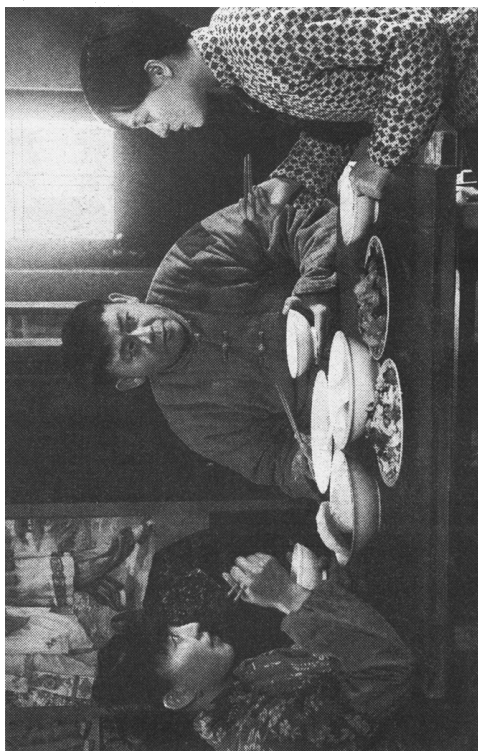
中国国内で話題作を多数手がける大連市の制作会社などがドラマ化し、09年10月末、浙江省

で最初に放映され、高視聴率を記録。その後40以上の放送局で放映されている。

中国ではこの数年、日本を侵略国として描いた戦争ドラマが多数制作され、中国の愛国主義教育にも利用されてきた。これに対し、「小姨多鶴」は、一般の日本人を戦争被害者という立場から描くことで、視聴者に対日意識を見直す機会を与えているとの指摘もある。

ネット上に書き込まれたドラマの感想には、「戦争は中日双方の国民に害をもたらしていた」などと共感を寄せる声も多い。

中国 対日観変える視聴者も



多鶴(右)が老夫婦の次男夫婦と食事する「小姨多鶴」の一場面＝大連天歌伝媒提供

「ともに戦争で傷ついた」